靴の歴史散歩㊼

皮革産業資料館　常任委員　稲　川　　實

……古風なシルクハットをかぶり、だぶだぶのフロックコートを着、伊達（だて）なステッキをついた姿が、ありありと眼に浮かぶ。

高村光太郎先生の尊父光雲氏の指導の下につくられた銅像だが、いかにも明治の匂いが強かった。翁の逝去一ケ月前に建立せられたのである。その一種たくまざる諧謔味をたたえた、銅像自身は、そして製作者も極めて大真面目なのだが、時の流れがいつか諧謔の趣きを帯びさせた、その姿に惹かれて、

「あれは、どなたの銅像でしょう」

と、附近の女に尋ねたところ、

「なんでも靴屋さんのとか、――たしかそうでしたよ」

「ふーむ」

靴屋さんの銅像というのに、いよいよもって興味を唆られた。……私は暇を得次第、墨堤の旧桜組製革工場の跡を訪ねたいと思った。――銅像が無くなったというので、却って行ってみたい気持ちを強められたのである。

秋風が隅田川を吹き渡る頃になって、私は漸くにしてその隅田河畔に赴く機会を得た。

銅像はやはり無かった。――花崗石（みかげいし）の台座だけが残っている。そして台石に嵌め込んだ旌表の銅板も、取り去られていた。剝ぎ取り難いのを無理遣り剝ぎ取ったその跡は、無慙といえば無慙のていたらくであった。

土台のみ空しく残され、かのフロックコートの主の、夢のごとくに消え去っているのも、蕭々といえば蕭々たるありさまであった。あたりの秋の草も、既に侘しい末枯れの姿を示している。

……私はいつか台石の上に、今は無い温顔の銅像を思い描いていた。その幻の銅像は私に向って、

「――本懐である」と力強く話しかけた。

その銅像が再び私に言った。

「のほほんと、突っ立ってはおられんよ」

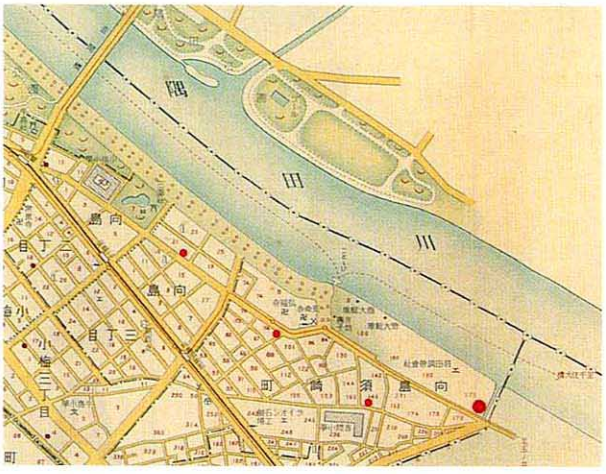
と次の瞬間、「おい、あぶねえよ」

これは現実の声であった。

「轢かれても知らねえぞ。そんな道の真ん中に、のほほんと突っ立って…」

転法な自転車が、隼のように私の鼻っ先を掠めた。

と、あって、小説『東橋新誌』は、いよいよ佳境に入ってゆくのだが、ここでは小説の内容を紹介するわけではないので、転載の方はこの辺で止めておきたい。　　（この項続く）



西村翁の銅像が存在した昭和15・6年頃の『本所区詳細図』（東京地形社刊）の部分
赤マーク（●）が銅像のあった場所

かわとはきもの No.112
2000年6月30日発行
登録番号(12) 2

発行／東京都立皮革技術センター台東支所
〒111-0023台東区橋場1-1-6
TEL（3876）2972ダイヤルイン
印刷／株式会社　第　一　印　刷　所
〒110-0003台東区根岸2-14-18
TEL（3871）4 2 6 1㈹

本紙表紙記事の無断転載を禁じます。

R70
本文は古紙配合率70%再生紙を使用しています